



TITLE:

幕末上海貿易の一史料

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

---

CITATION:

本庄, 榮治郎. 幕末上海貿易の一史料. 經濟論叢 1939, 48(5): 865-867

ISSUE DATE:

1939-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131239>

RIGHT:

# 京都市大學經濟學會 經濟叢論

第十四卷(第五號)

昭和十四年五月

(禁轉載)

## 論叢

貨幣の非中立性……………文學博士高田保馬  
日本の經濟力……………經濟學博士柴田敬

## 時論

支那法幣の前途と中南支貿易……………經濟學博士木村増太郎

## 研究

啓蒙時代に於ける支那研究とその現代的意義……………經濟學士島恭彦  
農山漁村民の所得と租稅負擔……………經濟學士田杉競  
ウエーバーの初期の研究……………經濟學士出口勇藏  
ウィケセルに於ける貨幣論の構想とその發展……………經濟學士服部新一

## 說苑

十四、五世紀に於けるイタリヤの簿記法……………經濟學士岡本愛次  
統計的集團に於ける形式的同種性……………經濟學士有田正三  
幕末上海貿易の一史料……………經濟學博士本庄榮治郎

## 附錄

## 彙報

## 外國雜誌論題

# 幕末上海貿易の一史料

本庄榮治郎

## 一

寛永鎖國以後、長崎貿易は受動的・一方的の貿易であつた。之に對しては貿易制限論や不必要論が唱へられ、事實は常に貿易制限の方向に進んだのであつたが、嘉永六年のペリー來航以後、開國貿易の方針が決定せられ、安政元年三月の日米和親條約によつて缺乏品貿易が行はれることとなつた。然しこれとても所謂居貿易であつて、我より海外へ渡航して積極的に交易するものではなかつた。茲に於てか出貿易の必要が説かれ、具體的の事實としても(一)文久元年四月の箱館奉行による龜田丸の黒龍江貿易(二)文久二年四月の幕府による千歳丸の上海貿易(三)文久三年十一月の幕府による健順丸の上海貿易を數へることが出来る。以上の事實については私が既に本誌第四六卷五號及第四七卷六號に於て論じた所であるが、こゝには上海貿易に關する

- 4) 蜷川博士、統計學概論<sup>7</sup> 64頁-74頁。
- 5) Flaskämper; a. a. O., S. 211.
- 6) Zizek; „Gleichartigkeit usw.“ S. 395.
- 7) Zizek; a. a. O., S. 394.
- 8) Zizek; a. a. O., S. 394.
- 9) Flaskämper; a. a. O., S. 212-3.

支那側の史料の一端を紹介したいと思ふ。

## 二

千歳丸による第一次の上海貿易は文久二年であり、支那にては同治元年に當る。今「清史稿」邦交志六、日本の條を見るに次の如き記述がある。(原文句讀點なし)『同治元年、長崎奉行乃遣人至上海、請設領事理其國商稅事。通商大臣薛煥不許。三年、日本商船介英領事巴夏禮、以求通。七年、長崎奉行河津、又致書江海關道應寶時言、其國人往來歐洲時、附西船經行海上、或赴內地傳習學術經營商業、皆有本國符信、乞念鄰誼保護、許之。』

右の文中同治元年の條に長崎奉行人をして上海に至らしめ云々とあるは、恐らく千歳丸の上海航行が英船アーミステースを買収しその乗組員をそのまゝ千歳丸の船員とし、即ち外人乗組員によつて上海へ導かれたもので、且萬事を和蘭領事に一任し、支那側も『蘭人支配なれば構無之』とし、貨物も和蘭の貨物として取扱つたため、かくの如く記述されてゐるものかと思は

れる。

健順丸による第二次の上海貿易は文久三年十一月に品川を出帆したが、上海へ着いたのは翌元治元年二月二十一日であるから、支那曆では同治三年に當る。同年の條に日本商船英領事巴夏禮を介して通を求むとあるのがそれである。健順丸は米船アルティア號を買収したものではあるが、日本人船長の下に日本人船員の手で上海へ航し、英領事を通して道臺に面會し貿易は和蘭領事の斡旋によつたものであつた。従つて右の如き記述が存するのであらう。猶「箱館健順丸上海へ發航一件」には『英國コンシユルセネラール、ハルケル人おゐては支那に關係いたし公事を引受取扱可申由、既に同人周旋を以<sub>土地之</sub>應寶時<sub>奉行</sub>名面會仕候間、其節猶又應寶時<sub>名</sub>一應來意申述、同斷相頼、和蘭コンシユル代クルウス<sub>名</sub>には商法の儀引受、是又取扱可申趣に付、早速商法人差出、日々引合爲及御試商法取引諸稅運上所向手數等に<sub>至迄</sub>聊無滯蘭館おゐて取計方爲相任』云々と記されてゐるから、英領事の名、并に當時

上海道臺が應寶時であつたことも明かである。

次の同治七年はわが慶應四年即ち明治元年に當り、長崎奉行河津とあるは河津伊豆守祐邦のことであるが、交渉の内容については今之を明かにし難く他日の研究に譲ることとしたい。

### 三

以上の「清史稿」の記載は極めて簡單であつて、既述の日本側史料に新に附加すべきものを有しないが、兩回の上海貿易について、最確實なる史料たる「清史稿」に右の記述を見出すことは興味ある事柄である。他日民間の史料により更に詳細なる事實の經過を知り彼此對照し得る機會を得たいものである。

因に「清史稿」は中華民國三年北京に清史館が創設せられ、館長趙爾巽以下、總閱、總纂、纂修、協修、徵訪、提調、收掌及校勘等職員前後無慮數百人を以て十四年の歲月を費して民國十六年に脱稿したが、正史として刊行するに先立ち洽ねく海内天下の士に示してその繩愆糾謬を得んと編者の謙遜から、先づ同年夏

「清史稿」として刊行せられたもので、其體裁は從來の正史殊に明史に倣ひ、本紀二十五卷、志百四十二卷、表五十三卷、列傳三百十六卷、凡て五百三十六卷より成るものである。然るに南京政府はその民族主義の立場から之が一大改修の要を認め、其發賣を禁じたが、適々滿洲國成立するに及び、新京大同印書局より之が小形影本の發賣を見るに至つたものである。

（附言）本稿は東亞同文書院教授穗積文雄氏の教示による所である。茲に特に記して同氏の厚意を深謝する。